

# 親の教え

スペースふう理事長 永井寛子さん



ながい・ひろこさん 1947年富士川町生まれ。日本女子大卒。99年「スペースふう」設立。元増穂町議会議員、元富士川町議。山梨マイククラブ、スチック削減プロジェクト代表。

や出迎えるときは、母の智慧子さんや姉たちと共に三つ指をついた。

一方で安造さんは、子どもを全員、大学に行かせることが親の務めと考えていた。足袋の需要が激減し、会社の経

大学や高校に通う東京に母親と共に転居させ、自分は山梨での仕事を続けた。また、東北から集団就職で来ていた従業員には花嫁修業として、茶道や華道を習わせた。「厳しい反面、家族や従業員をとても大切にしていた」

## 思いを手紙で

そんな父親に初めて反抗したのは高校生するとき。楽しんでいた学校での映画鑑賞の

とき。4人の姉は見合い結婚だったため初めは反対されたが、最後は寛子は何があっても大丈夫。全部任せると、自分の思うように生きなさい」と許し、「あの手紙で反省したよ」と付け加えたという。「自信がついたと同時に、間違っていたことはできないという責任を感じた」と振り返る。

## 「存在の危機」

永井さんは英語塾を経営する傍ら、地域

# 「思うように生きよ」

活動に取り組み、同町議会議員を経て1

再利用可能なリユース食器のレンタル事業を行う認定NPO法人「スペースふう」(富士川町)。理事長の永井寛子さん

ん(73)の父・入原安造さんは、甲府市で、足袋を製造販売する会社を経営していた。太平洋戦争の悪化に伴い、家族や住み込みの従業員を連れて増穂町(現富士川町)に転居。戦後、6人きょうだいの末っ子として永井さんが生まれた。

## 絶対的な存在

「父は家族や従業員に対して非常に厳しく、絶対的な存在。誰も逆らうてはいけないな」と。毎朝6時に安造さんが鳴らすブザーで起床し、掃除をした後、会社の経営状況から世界情勢までを語る安造さんの講和を聞いた。見送り



母・智慧子さんに抱かれる永井寛子さんと父・安造さん、4人の姉(1949年、富士川町の自宅)

管は厳しくなっていたが、永井さんが小学4年のころ、すかに終わらなかつた。娘の気持ちを察した智慧子さんが話を避ると、「どちらが大切なのだ」と激怒。永井さんは学校を休んで一日中泣いていたが、「私の気持ちを伝えてくれなかつた父への反感は、しっかりと伝えなければならぬ」と決心し、叱られることを覚悟で安造さんに手紙を書いた。しかし、安造さんは何も言わなかつた。

手紙の話が出たのは、増穂小時代の同級生との結婚を決意した

99年、地元的女性10人とリサイクルショップ「スペースふう」を設立。2003年には全国に先駆け、使い捨てプラスチック削減を目的としたリユース食器のレンタル事業をスタートした。

しかし現在、新型コロナウイルスの影響でイベントや祭りが中止となり、リユース食器約20万個の稼働率はゼロ。今年1月、約1000万円を借り入れて導入した新しい食器の洗浄機は一度も使っていない。永井さんは「存続の危機」と訴え、9月28日までクラウドファンディングで支援を募っている。「未来の子ども

たちに持続可能な循環型社会を伝えることが使命。浸透しつつあったリユース食器の灯を消すわけにはいかない」。安造さんにお墨付きを得た信念を貫いていく。